

論文の内容の要旨

氏名：堀川 佑 惟

博士の専攻分野の名称：博士（心理学）

論文題名：レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見に仮想接触が及ぼす効果—日本人大学生を対象とした検討—

本論文は、日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見に、レズビアン及びゲイ男性との仮想接触が及ぼす影響を扱った社会心理学研究である。以下の図に示す通り、論文は4部構成である。

第Ⅰ部 レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見

- ・異性愛者の大学生が持つレズビアン及びゲイ男性に対する偏見の強さ
- ・レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度
- ・レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者のステレオタイプ

第Ⅱ部 レズビアンとの仮想接触がレズビアンに対する偏見に及ぼす効果の検討

- ・レズビアンとの仮想接触がレズビアンに対する日本の女性異性愛者の態度に及ぼす効果の検討
- ・仮想接触が偏見に及ぼす効果の一般化可能性—精神疾患患者との仮想接触を扱った検討—

第Ⅲ部 レズビアン及びゲイ男性との仮想接触効果に影響を及ぼす要因

- ・イメージの利用可能性に関する研究の仮想接触研究への応用
- ・仮想接触への集団間接触研究の応用

Ⅳ部 総合考察

第Ⅰ部 レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見

第Ⅰ部は5章構成である。計4本の研究によって、日本の異性愛者の大学生が持つレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見について、態度とステレオタイプの観点から明らかにすることを試みた。

第1章「序論」では、レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見に関する先行研究を概観し、その偏見に関する日本特有の問題を挙げた。

第2章「異性愛者の大学生が持つレズビアン及びゲイ男性に対する偏見の強さ」の目的は、研究1によって、異性愛者の大学生が持つレズビアン及びゲイ男性に対する偏見の強さを、他の集団に対する偏見と比較することであった。この比較によって、日本の異性愛者の大学生がレズビアン及びゲイ男性に対する

偏見を有すること、そしてその強さが黒人や精神疾患患者などの他の社会的マイノリティ集団と同等程度に見られることを確認した。

第3章「レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度」では、研究2と研究3の2本の研究を通して、レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度を測定する尺度である日本語版 Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale (ATLG-J) の作成と妥当化を行った。そしてそれらの研究によって、日本におけるその態度が他国で行われてきた先行研究でみられたものと同様の概念であることを確認した。

第4章「レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者のステレオタイプ」では、研究4によって、共同性・作動性の2次元によってレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者のステレオタイプを表すことを試みた。その結果、女性異性愛者が持つレズビアンステレオタイプ、男性異性愛者が持つゲイ男性ステレオタイプが共に高共同性であり、伝統的女性ステレオタイプと同じ傾向がみられることが示された。

第5章「第I部総合考察」では、第2章から第4章までの結果を総括し、レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見に対する実験的アプローチを行うために情報の整理を行った。

第II部 レズビアンとの仮想接触がレズビアンに対する偏見に及ぼす効果の検討

第II部は4章構成である。計4本の研究によって、レズビアンとのポジティブな仮想接触 (imagined contact / imagined intergroup contact) がレズビアンに対する偏見に及ぼす効果について検討することを試みた。

第6章「序論」では、まずこれまでに行われてきた仮想接触研究を概観した。その後、これまでのレズビアン及びゲイ男性との仮想接触の研究をまとめ、その課題の解決にあたって日本における仮想接触実験の追試の必要性について述べた。

第7章「レズビアンとの仮想接触がレズビアンに対する偏見に及ぼす効果の検討」では、レズビアンに対する女性異性愛者の偏見について、レズビアンとの仮想接触を行うことによる影響を研究5から研究7の3つの研究を通して検討した。3つの研究の実験において、実験条件に割り当てられた参加者である女性異性愛者の大学生は、初対面の女性同性愛者と2人で休日を過ごす場面を想像した後に、その内容を用紙に書き出す実験操作を受けた。統制条件の操作として、研究5、研究6では女性との仮想接触を、研究7では女性同性愛者について単に考える課題をそれぞれ行った。そしてその後、全ての参加者は、レズビアンに対する集団間不安、顕在的態度、行動をそれぞれ測定した。その結果、レズビアンとポジティブな交流を行うことを想像することによって、その後のレズビアンに対する顕在的態度や行動がポジティブになることが一部の研究で示唆された。ただし、それらの結果の再現性は、この3つの研究では認められなかった。

第8章「仮想接触が偏見に及ぼす効果の一般化可能性—精神疾患患者との仮想接触を扱った検討—」では、第7章でみられた仮想接触の効果がレズビアンとの仮想接触以外でも見られるものなのか、あるいはレズビアンとの仮想接触特有の効果であるのかを確認するため、研究8を行った。同性愛者以外の外集団のメンバーとして精神疾患患者を取り上げ、研究7と同様の方法で仮想接触の効果を検討した結果、レズビアンとの仮想接触とは異なる傾向が見られた。

第9章「第II部総合考察」では、第7章と第8章の結果を総括し、レズビアンとの仮想接触の効果と結果の解釈可能性について考察した。

第III部 レズビアン及びゲイ男性との仮想接触効果に影響を及ぼす要因

第III部は4章構成である。計2本の研究によって、レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度をポジティブにするためのより効果の強い仮想接触の手段を提案するため、仮想接触効果に影響を及ぼす要因について検討した。

第10章「イメージの利用可能性に関する研究の仮想接触研究への応用」では、まず、イメージの利用可能性に関する研究について概観した。そして、仮想接触においても接触場面の想像しやすさによって効果を高められるのではないかと提起した。その仮説を検証すべく、研究9によって、ゲイ男性との交流がより想像しやすい場合、より想像しにくい場合に、仮想接触によってその後のゲイ男性に対する態度にどのような影響が及ぶかを検討した。具体的には、ゲイ男性である仮想接触相手がゲイ男性ステレオタイプと一致するポジティブな性格特性を有している、あるいは、ゲイ男性ステレオタイプと不一致であるポジテ

ィブな性格特性を有している、という情報が参加者に与えられる場合に、そのような情報が与えられない通常の仮想接触よりも、仮想接触によってゲイ男性に対する男性異性愛者の態度がポジティブになるかを検討した。その結果、ゲイ男性ステレオタイプと不一致であるポジティブな性格特性を有するゲイ男性との仮想接触で、通常の仮想接触よりもその後の集団間不安が高いことが示された。

第11章「仮想接触への集団間接触研究の応用」では、まず、集団間接触に関する研究について概観した。そして、自身と接触相手である外集団のメンバーの双方と仲が良い内集団のメンバーを交えた三者での接触の想像が、二者間での仮想接触よりも外集団のメンバーに対する偏見をより低減しやすい可能性を提起した。その仮説を検証すべく、研究10によって、三者間でのレズビアン及びゲイ男性との仮想接触が社会的認知に及ぼす影響について検討した。具体的には、仮想接触を行うレズビアンが、同席する自身と仲が良い同性の異性愛者と仲が良い場合、同席する自身と仲が悪い同性の異性愛者と仲が悪い場合それぞれについて、これまで扱ってきた通常の二者間の仮想接触と比較してレズビアンに対する異性愛者の態度がどのように変わるかを検討した。その結果、想像する場面に同席する同性の異性愛者がいる場合には、いない場合よりも、仮想接触後のレズビアンに対する集団間不安が高いことが示された。

第12章「第Ⅲ部総合考察」では、第10章、第11章の研究を総括し、レズビアン及びゲイ男性に対する仮想接触研究の限界と展望について議論した。

第Ⅳ部 総合考察

第Ⅳ部は3章構成である。本論文の総合考察として、研究結果の概要をまとめ、研究の意義と今後の展望について述べた。

第13章「研究結果の概要」では、本論文における研究の結果を、日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見と、それに対する仮想接触の効果とに分けてまとめた。第Ⅰ部で示された日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見については、第Ⅱ部以降の仮想接触研究において、諸外国におけるその偏見と同様の概念として扱えること、その一方で日本特有の要因によって説明され得る可能性である概念であることがそれぞれ示唆されたことを述べた。日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する仮想接触の影響については、女性異性愛者が行うレズビアンとの仮想接触にはレズビアンに対する偏見を低減する効果があると考えられること、態度をポジティブにする効果は集団間不安の低減を介さない効果であることが示されたことをそれぞれ述べ、それらについて第Ⅰ章における研究結果も踏まえた考察を行った。

第14章「本論文の意義と今後の展望」では、本論文の意義と今後の展望を述べた。レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見の研究としての意義、仮想接触の研究としての意義をそれぞれ述べた後に、今後の展望についてまとめた。前者の意義として、日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の顕在的態度を測定する手段としてATLG-Jを開発・妥当化したこと、レズビアンステレオタイプとゲイ男性ステレオタイプの双方について共同性－作動性の次元から示し、具体的な性格特性語レベルでも示したことの2点を挙げた。後者の意義として、著者が知る限り本論文の研究が日本における初の仮想接触研究であるために研究の方法や結果が今後の研究において参考となり得ること、レズビアン、ゲイ男性、精神疾患患者との仮想接触が偏見に及ぼす影響についての知見をもたらしたこと、これまでの研究で扱われてきた仮想接触の手続きを改善するための多くの示唆が得られたことの3点を挙げた。

第15章「本論文の結論」では、日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度がこれまで同様の先行研究が行われてきた諸外国と同様に扱うことが可能であることと、レズビアン及びゲイ男性との仮想接触がレズビアン及びゲイ男性に対する日本における異性愛者の大学生の偏見に影響を及ぼすこととを結論とした。